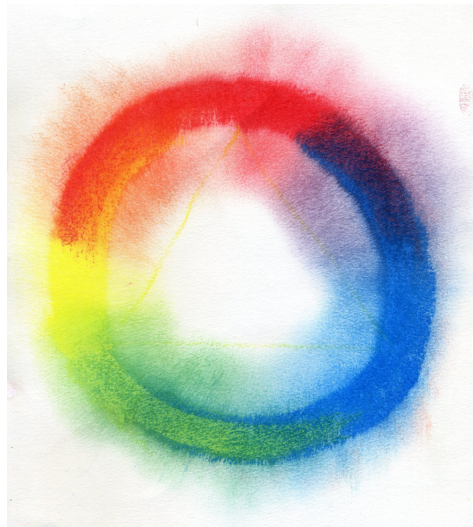


## 【KOOSAIHO とは】

自然界の色彩は、太陽という光と、地球という影によって作りだされます。

光という輝きと、影という闇が出会うところに色彩は生じ、我々は、そこに現れる現象を“虹、”と呼びます。

自然界の色彩は、この虹の色の複雑に重なり合うところに現れ、我々人間は、その虹の表れを、絵の具の赤・青・黄を用いて、最もシンプルな三つの個性の関わり合いにして示すことができます。



KOOSAIHO は、この虹の色を構成する各々の色を自然の色彩の中に観察して、その個性に寄り添いながら、順に重ね合わせてゆく描法です。

### ＜重ねる色の説明をする前に、絵の基底になる画用紙について＞

絵を描く際の画用紙の色を、光の輝きと見做すことにします。

（ちなみに、光は、物質的な明るさではないため、絵の具の白で光の色を現すことはできません。唯一、絵の具のどの色よりも明るい画用紙の明るさを、光の色に見立てて話を進めさせていただきます。）

つまり、画用紙の明るさは、色を生じさせる一方の極になります。ですから、色彩は、この明るさから出発して影に向かいながら生じてくる。……とすることができます。

そしてこのことは、逆に言えば、最も暗い影の中から出発した色は、光に向かいながら虹の色を帯びる。——と。

つまり……、描く前の画用紙は、まだ何の色も生じていない基点であり、それは取りも直さず、人間の存在していない環境のようなものである。とみることもできます。

そしてここに、虹の色の最も明るい黄色が乗ることで変化が生じます。

1、先ず、虹の色の中で最も明るい黄色を、指の腹に擦りつけて画面全体に薄く広く伸ばしてゆきます。

この時わたしたちは、輝きを持つ黄色ではなくて、影を帯びた黄色を見ることになります。

この黄色は、輝かせてくれる色と出会うまでは輝くことができません。



2、そしてここに、実際の風景を観察しながら、影の色・・・つまり青を、ごく薄く指の腹に擦りつけて（影の中に隠れている青の色に意識を集中しながら）乗せてゆきます。



3、影の濃いところと薄いところを観察しながら、空の色は極うすく、緑の中には濃くのせてゆきます。

（※黄色の強さに見合う程度に加減しながらのせてゆきます。）



4、しかし、ここではまだモノの姿らしきものは現れて来ません。  
光に対する影の存在が確認できるだけです。



5、青を乗せたら、ふたたび黄色に意識を向けます。

すると、最初感じたときとは違った黄色が感じられてきます。

これは、画面の中に青が入ったことで、互いの関係性が生じて、黄色（明るい色）は、青（影の色）によって、より輝きたいと望む……、そのように（観察する人の感性に応じて）黄色が、より強く感じられてきます。



6、黄色に意識を集中して、どうじに青の強さにも意識を向けながら（青に導かれるように）、自分の感じる強さで黄色を重ねてゆきます。

※とにかく、色に集中してください。意識が形に向かうと、色がまったく見えなくなって濁りになります。

7、青に見合う黄色を乗せたら、ふたたび青に意識を切り替えます。  
・・・と、このように、黄色と青の重ねを繰り返しながら、どうしてもモノの姿が欲しいと感じたときは、青で、極うすく、自分の感じる線（概念化されていないイメージ）を描いて行きます。

※虹の色の重なりが進行するにつれて、線が概念化されてゆきますので、そこに応じて進めて行きます。

指で描いたり、直接クレヨン当てて描いたり、ここでは、そのときの自分の感じるままに従います。



8、こうして画面には、黄色という、虹の色の中で最も明るい色と、青という影の個性によって、空間（風景）が現れてきます。

・・・しかしここにはまだ、実体というものが感じられません。

9、黄色と青を重ねてゆき、もうこれ以上重ねられない、……つまり、山が山として、木が木として、葉っぱが葉っぱとして、土が土としてその姿を強く求めるとき、そのときはじめて赤に進みます。



10、そしてどうぞ、木の幹や、石や、物の形のある部分に、指の腹に少しだけ擦りつけた赤を置いてみてください。

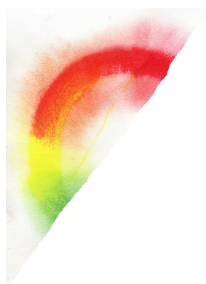


そのとき……はじめて、モノの実体が絵の中に入った。……と、感じられるでしょう。

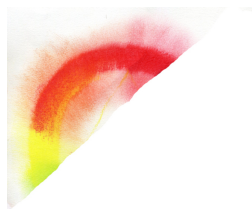
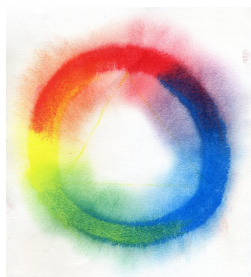


※つまり、黄色の明るさ、青の影、赤の実質。……とは、それぞれ三つの色の持つ個性なのです。

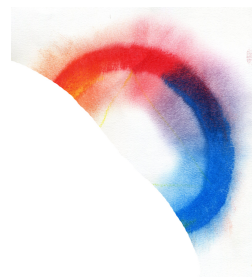
昼の色



虹の色



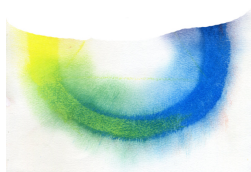
青がないときの黄色と赤



黄色がないときの青と赤



夜の色



赤がないときの青と黄色

※上図のように、三つの個性が揃ってはじめて、それぞれの色が輝きはじめます。

この三つの個性の連鎖は、……紫や、オレンジや、群青や、赤紫や緑へとつづく個性に繋がります。

——と、このように、感情を通して進められてゆく色の体験は、自然の色彩の観察に止まることなく、自己の内側へと世界を広げてくれます。

KOOSAIHO は……、自然の色彩の観察を通して、自然界の美しさと豊かさに触れながら、同時に、そのことによって、自己の未熟さと、いたらなさに気付くように促します。

そしてそれが、自分の無限の可能性を示唆してくれることになります。

ところが…… AI は、人間の、その未熟な部分を隠してしまい、そのことによって……人は、自分自身の豊かさに気付く機会を失っていくでしょう。

ところで……、最初に、画用紙の明るさを虹の色を現す一方の極（基）と見做すことができたのは、実は、われわれ人間の側に、もう一方の極、つまり、暗さの基があるからです。

※そのために、KOOSAIHO では、黒の使用を極力控えるように勧めています。  
（実際、画面の中に黒が入ると、深い色の観察が困難になります）

われわれ人間の内面には、認識できないほどに暗い影の色が広がっていて、そこから、光の方に顔を向けたときに、色彩であるものの豊かさが認識されて、自己の内面を照らす“ひかり”へと変化させて行くことが出来るのだ。……と考えます。

この、光と影の現す虹の色彩の探究は、人間の内に秘められた豊かさの探求に繋がって行くと、信じて疑えません。

2026 年 10 月 瀬崎正人